

体外受精で発育不良であった症例に対する delayed start protocol の有効性の検討

徐クリニック ARTセンター

峰千尋、清須知栄子、伊藤真理、中塚愛、徐東舜

【目的】

GnRH アンタゴニスト法において、卵巣刺激の開始を遅らせることにより FSH の抑制期間を延長させる方法 (delayed start protocol : DSP) は、より多くの卵胞の発育を促進させたり、胚発育を改善させるとの報告がある。今回、DSP によって採卵数が増加するか調べると共に、胚発育及びその後の妊娠率と流産率に影響を及ぼすか検討した。

【対象】

2015 年 10 月から 2017 年 4 月までに、当院にて体外受精目的で、調節卵巣刺激を 1~3 周期行ったが良好胚が獲得出来なかった、もしくは移植を行っても妊娠に至らなかった 14 症例を対象とした。それらの症例に対し、次周期に DSP を行った。平均年齢は 37.4 ± 2.6 歳、平均 AMH 値は、 3.1 ± 2.5 ng/ml であった。

【方法】

DSP 周期において、黄体中期からプラノバルを内服し、その後プロギノーヴァ 2錠 (4mg) を一週間投薬した。月経 2 日目からセトロタイドを 3~7 日間投与した後、hMG 投与を開始した。18mm 以上の卵胞が発育した後トリガーに GnRH アゴニストを使用し、36 時間後に採卵を行った。DSP を行った前の周期 (事前周期) と DSP を行った周期 (DSP 周期) のそれぞれの平均採卵数、正常受精率、分割率、胚盤胞率、良好胚盤胞率を比較した。また、胚盤胞移植における妊娠率と流産率も調べた。

【結果】

事前周期と DSP 周期のそれぞれの平均採卵数は、 9.2 ± 4.5 個 vs 8.9 ± 5.3 個であり、差はみられなかった。正常受精率は、55.2% (107/194) vs 52.4% (65/124)、分割率は、66.0% (128/194) vs 64.5% (80/124)、胚盤胞率は、29.7% (38/128) vs 36.3% (29/80)、良好胚盤胞率は、6.3% (8/128) vs 10.0% (8/80) で、全ての項目に差はみられなかったが、胚盤胞率は DSP 周期でやや高い傾向がみられた。胚盤胞移植における妊娠率は、0% (0/19) vs 43.8% (7/16) と、DSP 周期が有意に高かった。(P<0.01) DSP 周期の流産率は、42.9% (3/7) であった。

【結論】

DSP で採卵数は増加しなかったが、胚発育に良好な傾向がみられ、妊娠率も良好な結果が得られた。